大切なこと (2)

守 永英子

再び

保育の中の小さなこと

保育室の中には、私のところに、K子が花を摘んで見せにきた。新学期が始まったばかりの春の庭は、片隅の雑草もかわいい花をつけ、子どもたちは花摘みを楽しむことができる。

K子は三年保育からはいった二年目の子どもで、おとなびて、きついところがある。自分のことはよくできるが、人との関係は、あまりなんかめらかではない。相手が自分の考えをぐっすり伝えるわよ、と激しく自分の考えを主張し、相手を否定し続ける

ながら、私は、K子のこの穏やかな気分の働きかけの重なものに感じ、このかわりのときを、もう少し持ちこたえたいと思った。

みんなに、「K子ちゃん」とか、「N子ちゃん」とか、「お名前があるでしょ。このお花にも名前があるのよ」と言っている。このとき、K子はぼんやりと

— 32 —
かつて甘えていえるような仕草をみせたことはなかった。おとなのです手を振り払い、自分で出すことを誇る子どもであった。そのK子が……と思うと、思いきった。数人の子どもたちに出たとき、手をつなぎにきたのがK子だったのである。そのときも、軽い驚きを感じたのであったが、やはりK子は最近変わってきたようなある。「これじゃない？」と、K子は、自分の持っている花と似た花の絵をみつけて、「まるしおん」と読みあげた。これ「まるしおん」という花ちょうのよう。K子は、花の名前を見つけて、とても満足した様子であった。そして、そばにいたM男が手にしていった小さな黄色の花の名前を見つけて、とても驚いた様子であった。
M夫の場合は、また違った形で現われた。M夫も三年保育からはいっている子どもであるが、昨年は「なかなか自分から遊べない、遊びに打ちこめない」ということが私心中かかっていた。分がり、おとなをこまらせることがなかったが、よく私の周囲にいて、他の子どもを追い回すことができる。あんなことしちゃいけないといっただけ、「ねんどうをし方を考え、工夫してきたい」など自分から言い出すこともあり、それに応じて用意しても、しっかり見せても、じきにやめてしまう。

このようなM夫の様子に心を暖ませながら、かわり方を考え、工夫してきた。一年間であったが、なぜ、そのままでいるかといえば、「実の生活の中でのM夫の姿のずれを感じている」と考えた。

五日連休が明け、初めて出かける日であった。M夫は、いつものように早く出発してきた。そして、私の顔をみつめながら、「幼稚園は絵本しかないから、つまらないなあ」と言っているのである。絵本ばかりだから、私を驚かせた。遊べない子どもとまって、去年一年の間に、いろいろなことをしたわけではない。砂場、ぶらふ、ねんどう、積木、そして、男の子たちは、特に、レールをつないで車を走らせることが好きであった。M夫も、いろいろな遊びを経験していたはずである。そのM夫が、「絵本しかないか」と言う。

突然の出来事に、私には、そのことの意味がとらえられなかった。「K夫ち、M夫ち、何があるのか教えてあげてね」と言うと、まじめなK夫は、「自動車もあるし、砂場もあるし。つまらないと」。と指摘した。

M夫はその方に目をやったが、また私の方に向き、「だんた、朝まですぐお外のことを行ってもいいの？」と問いかけた。
これをした時、すぐに好きな活動を始めていたのですが、全く어서いない。一年間その様子を見てきたのではなかったか。

小さい子供さんのことが心に出ていた。それは一日中、M先生は、すぐに遊んでいた。

中、部屋に戻ってこなかった。M先生が周囲のことを気にしていない。一つの遊びに打ち込むのは、これが初めての気がする。何か、ふっと切れたようにあった。

この不思議とも思える出来事は、朝の出会いのほんの小さなことである。それが、M先生はこの日を境に、はっきりと変わりかけていた。M先生は、「自分にとらわれていたもの」「周囲の状況」との違を、修正して、「とらわれ」から解放され、「心に自由を得た」のであろう。興味深い出来事であった。

M先生のこと、子のこと、毎日の保育の中では、小さなもの大きな変化にも気づくとき、保育者のその子を見ると、保育者の目が変わるとき、それが受けて、子ども自身の「自己」のとらえが大きく横たわっていることを考えると、子どもたちの行動の根底に、子ども自身の「自己」のとらえが大きく横たわっていることを示すものであろう。子どもたちの行動の根底に、小さなことの大きな意味をしみじみと感じるのです。